

北播磨地域の自然を子どもたちと一緒に観察する

吉田 士郎・向山 和利

(NPO法人 北播磨市民活動支援センター 自然観察サポーターチーム)

■はじめに

私たち(「自然観察サポーターチーム」)は、NPO法人北播磨市民活動支援センターが主催する北播磨地域自然指導員養成講座の受講生です。北播磨地域自然指導員は、北播磨の自然を子どもたちにわかりやすく伝える役割を担う大人たちです。兵庫県立人と自然の博物館の協力を得ながら、生き物の観察の仕方等を平成18年度から学んでいます。

平成19年8月に、子どもたちに参加してもらって、自然観察プログラム『自然と遊ぼう!「生き物マップ」づくり』を実施しました。今回は、このプログラムを中心に報告します。

■『自然と遊ぼう!「生き物マップ」づくり』の実施

このプログラムは、加東市にある「やしろの森公園」を使って、生き物を採取したり、写真に写したりしながら観察して、最終的にそれらを地図(生き物マップ)にまとめるというものです。夏休み期間の連続した2日(土・日)で行いました。

<実施内容>

- ・場 所：兵庫県立「やしろの森公園」(加東市)(1日目)
小野市うるおい交流館エクラ 中会議室(小野市)(2日目)
- ・時 間：1日目10時~13時(3時間;昼食時間含む)
2日目10時~12時(2時間)
- ・参加者：子ども9名(小学3~6年)、指導員23名
- ・グループ分け：参加者は、青・赤・緑の3つのグループ(子ども3人ずつ)に分かれた
- ・プログラム内容：1日目は公園の散策路を歩きながらの野外活動(採集・観察・記録)
2日目は室内で前日に観察したことをまとめたり、写真等を地図にはる

■1日目「採取・観察・記録」の子どもたちの様子

子どもたちは、グループごとに虫採り網や虫かご、カメラ、ビニール袋、地図などを持って野外にでました。はじめ、どのようにしたらよいのか戸惑っていたようでしたが、だんだん時間とともに慣れてきたようで、途中から自分が思うような行動をはじめようになってきました。アカガエルやヒメタイコウチなど、はじめて目にする生き物もあり、楽しそうでした。アリ地獄(ウスバカゲロウの幼虫の巣)を自分で試して観察している子もいました。当日、はじめて顔を合わせて一緒に行動したためか、(特に高学年になると?)子ども同士での会話が少ない子もいました(あるいは、面白くなかったのかなあ)。

■2日目「まとめ」の子どもたちの様子

この日の前半の子どもの行動をみていると、時間内に本当にマップが出来上がるのだろうかと不安になりました。子どもたちと十分に話し合う時間もなく作業をはじめたのも一因だと思います。その後、作品づくりの大まかな説明をすると、結構うまくやりこなせる子もいました。時間の制約がありましたが思ったよりも(大人からみて)良いマップができたと思います。子どもの独創性に感心しました。



ケネザサの葉で笹舟をつくる (1日目)



採った昆虫と写真撮影 (1日目)



採集した昆虫をしらべる (1日目)



採集した植物を雑誌等にはさむ (1日目)



「生き物マップ」として、まとめているところ (2日目)



採取した植物の押し葉標本や野外で撮影した写真、様々な形に折ったり切ったりした色紙を貼ったり、絵を描いたり、観察したことを書いたりして、楽しい作品ができました。

緑グループの「生き物マップ」



青グループの「生き物マップ」



赤グループの「生き物マップ」

■子どもたちと一緒に観察して、感じたこと

プログラム終了後に、参加した指導員に聞いた意見を事務局（NPO法人北播磨市民活動支援センター）で、取りまとめられました。その結果の一部を下記に示します。

<指導員の意見>

◆「子どもの興味」について

- ・植物（特に花）に誘導しようと思ったが、「虫追い」に負けた。
- ・セミのぬけがらを集めたかったが、子どもたちは、動いているものの方に気持ちが行き、あまり関心がなかった。
- ・捕まえた虫は、（好きで）持っておきたいという気持ちがあったようだ。
- ・採る楽しみが、つくる・まとめるという楽しみには、つながりづらかった。
- ・（2日目に、ことば少な）1日目の話を聞かせてくれたので、やれやれ少しは・・・。

◆「子どもたちは、どのように感じていたか」について

- ・わからない。メダカをさがしている時は楽しそうだった。アリ地獄、キジ笛も楽しそうでした。
- ・あまり楽しそうでなかったと感じたが、メダカ取りとアリ地獄に興味を持っていたと思う。
- ・（子どもたちは）楽しかったと思う。自分たちで行動し、大人がついて行く位であった。
- ・遊びの中に何か発見する顔を見ると目が生きている。
- ・（子どもたちは面白いと）感じていた。虫追いに夢中になり、真に輝いていて、人の話しも耳に入りにくい状況。
- ・虫採り。ふだん捕れないものが捕まえられる。笑顔が違う。
- ・虫ばかりになってしまいましたが、子どもたちは、ひたすら夢中に採集していました。

◆「子どもに対する接し方」について

- ・現地での活動に対して、子どもたちが自由に活動できて、かつ安全に注意した。
- ・子どもたちと一緒に楽しく採取・観察ができた。
- ・知識のおしつけではなく、参加者自身に体験して、感じたり気付いてもらうようにした。
- ・「子どもに主体性を!!」と思って、あまり口出しせず、見守った。
- ・子どもの興味の引き出しをもっと丁寧にすればよかった。

◆「子どもの人数に対して、指導員数が多かったこと」について

- ・多くのスタッフ（指導員）が考えを提供していたので、受け身の子どもを作りだしたのでは

ないかと反省。

- ・今後こうした場があった時も講師陣（指導員）が複数で対応するのがよい。違った視点での対応ができる。
- ・子どもが少なかったので、よくまとまって行動してくれていた。

◆「その他の、子どもたちへの支援」について（知識を伝えることだけが支援ではない？）

- ・名前（植物）を余り知らない為、記録に重点的に取り組んだ。
- ・補助として荷物もちに専念。
- ・自分が（も）、参加しているようで 誘導・支援はほど遠いと感じた。
- ・私の子どもの時代に行っていたカエルつりを行ったが、うまく行かなかった。

◆あらためて、このプログラムで重要だと感じたこと

- ・参加者（子ども）自身が体験（体感）すること。
- ・実物に重点をおくこと。
- ・実施内容と設定時間のバランスをよく検討すること。
- ・グループ分けに関して配慮（男女・興味・年齢など）すること。
- ・テーマを決める（「広いテーマ」、「狭くしぼったテーマ」）。
- ・指導員全員で下見をしっかりとる。
- ・打ち合わせ（指導員と子どもたち）をよくする（役割分担、テーマの共有）。
- ・指導員間の連携・コミュニケーションをスムーズにする。

■おわりに

この「自然観察サポーターチーム」は、チームとしては、活動をはじめたばかりです。メンバーの中には（自然観察をすることに関して）経験豊富な者から初心者までいて、各人の興味分野もそれぞれ様々です。今回のプログラムの実施で「子どもたちへの誘導・支援をどこまでやったらよいのか?」、「子どもたちに対して、どのようなプログラムをやったらよいのか?」、「限られた時間で、どのような活動をすればよいのか?」、「他の指導員との意見の違いをどのように調整すればよいのか?」など、それぞれ具体的な難しい課題がはつきりしてきたものと思われまふ。今回経験したことを生かし、地域の自然を子どもたちにわかりやすく伝えていくための活動を今後も続けて行きたいと思ひます。最後に、兵庫県立人と自然の博物館 研究員の小館誓治先生および環境カウンセラーの小倉 滋先生には、多大なる助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。